

パニウム - ナンバー・セブン

ダニエル書11章の解き明かし：1989年から日曜法に至る預言の流れ

Jeff Pippenger

2025-03-15

私たちは、1989年からアメリカ合衆国における日曜法に至るまでを表す40節の隠された歴史と関連づけて、ダニエル書11章のすべての筋道の一つにまとめる作業を進めている。預言を学ぶ者としての私たちの召しは、真理の言葉を正しく取り扱うことである。

神に認められた者として自分を示すよう努め、恥じる必要のない働き人として、真理の言葉を正しく扱いなさい。テモテへの第二の手紙 2:15.

ダニエル書11章は、十の預言的な区分に分けられる。1~4節が第一の区分に当たる。5~9節が第二の区分に当たる。10節が第三の区分に当たる。11節と12節が第四の区分に当たる。第五の区分は13~15節である。第六の区分は16~22節である。第七の区分は23節と24節である。第八の区分は24節から31節である。第九の区分は31節から40節であり、第十で最後の区分は40節から45節である。これら十の区分は、区分に区分を重ねてまとめられるべきである。

彼が誰に知識を教え、誰に教えを理解させるのか。乳離れした者、乳房から引き離された者たちなのか。

掟に掟を重ね、掟に掟を重ね、規則に規則を重ね、規則に規則を重ね、ここに少し、そこに少し。

というのは、彼は、どもる唇と異なる言葉をもって、この民に語るであろう。彼らに向かってこう言った、「これこそ、疲れた者を休ませる安息である。これこそ、いこいである。」それでも彼らは聞こうとしなかった。

しかし、主の言葉は彼らには、戒めに戒め、戒めに戒め、行に行、行に行、ここに少し、そこに少しとなった。こうして、彼らが出て行って、うしろへ倒れ、打ち砕かれ、わなにかかって、捕らえられるためであった。イザヤ書 28:9-13

十の預言的な各行はもちろん相互に関連していますが、各行の中に特定のテーマを認めることができます。各行には主要なテーマがありますが、それらはただ一つの証言にとどまるものではありません。私は、その十の行それぞれのテーマを特定するつもりです。

最初の行

また、メディア人ダリウスの第一年に、わたしは、まさにこのわたしが、彼を支え、強めるために立っていた。今、わたしはあなたに真理を示そう。見よ、ペルシアにはなお三人の王が起こり、第四の王は彼らすべてにまさってはるかに富む。彼はその富による力をもって、ギリシアの王国に対してすべての者を奮い立たせる。やがて一人の力ある王が起こり、大いなる支配をもって治め、自分の望むところのとおりに行う。しかし彼が立ち上がったとき、その王国は砕かれ、天の四方に向けて分けられる。そ

れは彼の子孫に渡らず、彼が治めていた支配の規模に見合うものでもない。というのは、その王国は根こそぎにされ、彼ら以外の他の者たちのものとなるからである。ダニエル書 11:1-4.

ダリウスの第一年は七十年の終わりを示し、したがって預言的な「終わりの時」を指し示す。第三節に至ると、アレクサンドロス大王がその世界帝国を樹立し、第四節では、その王国は打ち砕かれて天の四方に分割されることになっていた。1989年における「終わりの時」としてダリウスを用いるなら、第二節に示されている王たちを数えることができる。ガブリエルが第一節で「また、ダリウスの第一年に」と述べているとき、彼は第十章で始まった幻の最初にダニエルに告げた内容を受けて話を続けているのである。

ペルシアの王クロスの第三年に、ダニエル、すなわち名をベルテシャザルと呼ばれた者に、一つの事が示された。その事は真実であったが、その定められた期間は長かった。彼はその事を理解し、幻を悟った。ダニエル書 10:1.

「終わりの時」を表す道標は、二つの象徴を含んでいる。モーセの預言の系譜における「終わりの時」はアロンの誕生であり、その三年後にモーセの誕生が続いた。アロンとモーセは、彼らの歴史における「終わりの時」の二重の象徴であり、バプテスマのヨハネの誕生と、その六か月後のイエスの誕生を予表している。1798年の「終わりの時」は、ローマ教皇の捕縛によって画され、彼はその後1799年に拘禁のうちに死去した。「メディア人ダリヨスの第一年」から「ペルシアの王キュロスの第三年」に至るまで、ダリヨスとキュロスは1989年の「終わりの時」を表している。というのも、すべての預言者は、自らの生きた時代よりも、終わりの日々についてより多く語っているからである。

これらのことは皆、彼らに起こったのは、私たちに対する模範としてであり、また、それらは、世の終わりが臨んでいる私たちへの戒めとして書き記されたのです。コリント人への第一の手紙 10章11節。

ダリウスとキュロスは、一九八九年においてロナルド・レーガンとジョージ・ブッシュ（父）を象徴する。その年、両者とも大統領であった。第十一章第一節は、その幻をキュロスの第三年に置くが、これは、ダリウスに続いたキュロスのように、レーガンに続いたジョージ・ブッシュ（父）を表すことになる。第二節は、なお三人の王が起こり、第四の者は彼らすべてにまさってはるかに富む、と述べている。第十一章における最終の「終わりの時」は一九八九年に始まり、ジョージ・ブッシュ（父）の後に、なお三人の王が起こることを明らかにしており、こうしてブッシュ（父）に続く三人の大統領を特定する。その三人の王はビル・クリントン、ジョージ・ブッシュ（子）、バラク・オバマであり、そして最も富む大統領であるドナルド・トランプが「その力によって」また「その富によって、彼はすべてをギリシアの国に対して奮い立たせる」ことになる。

第三節はアレクサンドロス大王を導入しており、それゆえ、終末に教皇権と連合する国際連合の最後の指導者を象徴しているが、彼も教皇権と同様に終わりを迎える。国際連合は黙示録17章において十人の王として表されている第七の王国であり、その十人の王の同盟は、象徴的な一時間のあいだ、その第七の王国を教皇権の獣に与えることに同意する。

あなたが見た十の角は十人の王であり、彼らはまだ国を受けていないが、獣と共にひと時、王としての権威を受ける。彼らは心をつにし、自分たちの権威と力を獣に与える。彼らは小羊と戦いを交えるが、小羊は彼らに打ち勝つ。小羊は主の主、王の王だからである。また、彼と共にいる者たちは、召され、選ばれ、忠実な者たちである。ヨハネの黙示録 17:12-14.

その十人の王は、3節と4節によって、また四世紀にこれらの節を成就したアレクサンドロス大王の興亡の歴史によっても表されている。ギリシャは聖書の預言における第三の王国であり、竜を象徴する。すなわち、竜・獣・偽預言者から成る三者連合の三分の一をなすものである。十字架には「ユダヤ人の王」という文言がヘブライ語、ラテン語、ギリシャ語で記された。それは、過越の祭りのためにエルサレムにいたユダヤ人、ローマ人、そしてその他の諸国の群衆を代表していた。ギリシャ人は竜を表し、ローマ人は獣を表し、ユダヤ人は偽預言者であった。

第十一章の最初の四節は、人間に与えられた猶予期間が終わるとき、教皇権と姦淫する地上の竜の勢力の終わりを示している。第三節と第四節は、地上の竜の勢力の最後の現れにおける最終的な興起と没落を示している。最初の四節は、地の王たちと姦淫する獣の終わりを示す最後の六節に重ねられている。第十一章の冒頭と結末は、神の敵が助ける者もなくその終わりに至る歴史を示している。最初の四節は最後の六節と対応しており、そのことによって、十戒の象徴性、すなわち最初の四つの戒めの板と最後の六つの戒めの板を帯びるとともに、「十」という数による試みも象徴している。

最初の四節は、結末を描き出す「始まり」を表すと同時に、メッセージの起点を1989年の「終わりの時」に据えている。これらの節は、1989年から人類の猶予期間の終わりまでを表し、したがって最後の六節のメッセージを要約している。最後の六節は、1989年に封印が解かれて明らかになった知識の増大であり、猶予期間の終結に関わる出来事を特定している。

これらの節は、1989年から始まって大統領が合計で八人になること、そして八番目は先行する七人のうちから出てくることを認識するための預言的な拠り所を与えている。こうして、この箇所は八番目が七人のうちから出てくるという謎と結び付けられ、これは終わりの時代における現在の真理としての預言的特徴である。

これらの諸節から理解される主題は、ツロの淫婦と姦淫する竜の勢力の終局的滅亡である。その淫婦は地のすべての王たちと姦淫するが、496年にクロヴィスがその王位を教皇権に奉獻したとき古代フランスがカトリック教会の長子となったのと同様に、地の獣たるアメリカ合衆国もまた、日曜法においてその淫婦と姦淫する王たちのうち最初となるであろう。終わりの六節においてそうであるのと同様に、冒頭の四節も、世界をハルマゲドンへと導く三つの勢力すべてを指し示し、強調している。しかし、最初の四節における主題は、ギリシアとアレクサンドロス大王によって表象される竜の勢力である。

レーガンが始めた八代にわたる過程は、今やその八人目、最後の大統領へと至っている。八人目の大統領は獣の像を立て、米国で日曜法を施行するとともに、自らが国連の長となる取り決めを仲介してまとめ、その時点で国連は、過激派イスラムによる戦闘の激化を解決するという名目のもと、世界規模の政教一致の関係に入るだろう。

黙示録13章の地の獣であるアメリカ合衆国が、聖書の預言における第六の王国から、聖書の預言における第七の王国の頭へと移行し、同時に聖書の預言における第八の王国との不法な関係を成就していくことは、1989年を示す第1節から、アメリカ合衆国における日曜法へと導く歴代大統領を通して示され、そして直ちに、立ち上がる強大な王を指し示している。その強大な王とはトランプであり、彼は国際連合の支配権を掌握しようとしており、現在、自らの要求に先立ってそれを解体しつつある。

第2行

5節から9節は、章全体が主要な預言的背景として用いている北の王と南の王の戦いについての最初の言及であり、またそれを逐一説明している。5節はこの箇所を提示している。

南の王は強くなり、彼の諸侯の一人もまた強くなる。その者は彼よりも強くなって支配権を握り、その支配は大いなる支配となる。ダニエル書 11:5。

プトレマイオス1世ソーテルとセレウコス1世ニカトルは、その節に描かれている。両者はアレクサンダーの王国の「ディアドコイ」（後継者を意味する）の四分の一であった。セレウコスは第十一章における最初の「北の王」であり、異教ローマ、教皇ローマ、現代ローマと一致して、セレウコスが預言上の北の王として確立されたのは、三つの主要な勝利、あるいは転換点となる出来事の後でのみであった。すなわち、紀元前312年のバビロン奪還、紀元前301年のイプソスの戦い、そして紀元前281年のコルペディオンの戦いである。これらの出来事は、彼の主要なライバルたちを打ち破り、彼の帝国を拡大し、その地域における支配力を固めた。

第二行は、アレクサンドロスの分裂した王国の後継者（ディアドコイ）のうち、他のいかなる者とも区別して、北方の王と南方の王を特定することから始まる。そこでは、北方の王が三度の征服の後になって初めて権勢を得ることが示される。次いで、アレクサンドロスの死後に展開した覇権闘争の歴史のうち、六節から九節においては、南方の王が北方の王を打ち倒して終結する一時期が特定される。これは、第十一章において南方の王が北方の王に打ち勝つ三度の出来事のうち最初である。これら三つの出来事は、本章内部に三つの内的証言を提供し、南方の王が北方の王を打ち破るに至る歴史の道標を明確に確立している。

南の王は強くなり、彼の君侯のひとりもまたそうである。だがその者は彼よりも強くなって支配権を握り、その支配は大いなる支配となる。やがて年月の終わりに、彼らは互いに結び合う。南の王の娘が、和議を結ぶために北の王のもとに来るからである。しかし彼女は腕の力を保てず、彼も立ちえず、その腕もまたそうならない。彼女は引き渡され、彼女を連れて来た者たちも、彼女を生んだ者も、この時代に彼女を支えた者もまた引き渡される。だが、彼女の根から出た枝のひとつから、その地位に立つ者が現れ、軍勢を率いて来て、北の王の要塞に入り、彼らに対して事を起こし、勝利を収める。さらに彼は、彼らの神々を、彼らの君侯たちや銀と金の尊い器とともに捕らえ移して、エジプトへ運び去る。彼は北の王よりも長く存続する。こうして南の王は彼の王国に進み入り、やがて自分の地に帰る。ダニエル書 11:5-9。

これらの節の歴史的成就是、31節から40節に示されている教皇支配の1260年に関する予言的成就のための雛形を提供するとともに、紀元前217年のラフィアの戦いで最初に成就した11節の成就のための予言的雛形も提供している。その三つの証言は、ウクライナ戦争の特徴を明らかにしている。そこでは、南の最後の王であるプーチンが、教皇権の北の王の代理軍に打ち勝つことになる。

予言的歴史の第二の筋のテーマは、1798年に教皇権に致命的な傷がどのように与えられるかであり、これは5節から9節と、11節にあるラフィアの戦いによって示されている。南の王、すなわちエジプトは、竜の勢力である。

人の子よ、エジプトの王ファラオに向かって顔を向け、彼とエジプト全土に対して預言せよ。言え、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはおまえに敵対する、エジプトの王ファラオよ。おまえは、その川々のただ中に横たわる大いなる竜で、『わたしの川はわたしのもの、わたしは自分のためにそれを造った』と言った者だ。エゼキエル書 29:2、3。

第十一章に記された、南の王が北の王に打ち勝つ三つの描写は、総合すると、四十五節における北の王の最終的な没落を指し示している。

彼は海と海との間にある栄光の聖なる山に自分の王宮の天幕を張る。しかし、彼はその終わりに至り、彼を助ける者はだれもない。ダニエル書 11:45。

第十一章には、南の王が北の王を打ち負かすことを示す箇所が三つあるが、北の王が助ける者もなくその終わりに至るときについては、それほど明白ではない。だが、黙示録は、彼女の肉を食らい、火で焼いて彼女を滅ぼすのは竜の力であることを明らかにしている。黙示録から竜の力を理解すれば、四十五節で北の王を打ち倒すことになる王たちが誰なのか、すなわち彼らが竜であり、同時に南の王でもあることがわかる。その章には三つの直接の証言があり、それらは皆、ダニエル書と黙示録の連関によって示されているように、完全な成就を証ししている。

現代の教皇権を代表する「北の王」は、四十五節で、誰一人助ける者もなくその終わりを迎える。そして『ヨハネの黙示録』は、教皇権が竜の勢力の手にかかってどのようにその終わりに至るのかを明らかにしている。

あなたが獣の上に見た十の角は、淫婦を憎み、彼女を荒れ果てさせ、裸にし、その肉を食らい、火で焼き尽くす。というのは、神が彼らの心に、ご自身の御旨を成し遂げ、心をつにして、神の言葉が成就するまで彼らの王権を獣に渡すようにと、思いを与えたからである。黙示録 17:16、17。

十人の王たちは、教皇の北の王を火で焼き、彼女の肉を食べる。終末の王たちは竜の勢力である。

王や支配者や総督たちは、自らに反キリストの烙印を押し、聖徒、すなわち神の戒めを守り、イエスの信仰を持つ者たちと戦おうとして出て行く竜として表されている。彼らは、神の民に対する敵意において、キリストではなくバラバを選ぶという罪にもまた自らが有罪であることを示している。『牧師たちへの証言』 38。

十人の王たちは竜の勢力であり、それはギリシャの王国とアレクサンダーによっても象徴されている。それらの王たちは南の王たちである。というのも、彼らはエジプトの王であるファラオによって象徴されているからである。彼らは彼女の肉を食らうだろう。詩編作者が「悪しき者の会衆」と呼ぶ、預言的な「犬たち」でもあるからである。

犬どもが私を取り囲み、悪しき者の集いが私を包囲している。彼らは私の手と足を刺し貫いた。私は自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは私を見て、じっと見つめている。
彼らは私の衣服を自分たちの間で分け合い、私の上着のためにくじを引く。詩篇 22:16-18

教皇権は四十五節において北の王であり、テアテラの教会ではイゼベルによって象徴されている。

しかし、あなたに非難すべきことがいくつかある。それは、自らを女預言者と称するあの女イゼベルを容認し、彼女が教え、わたしのしもべたちを惑わして淫行を行わせ、また偶像に供えたものを食べるようにさせているからである。わたしは彼女にその淫行を悔い改める猶予を与えたが、彼女は悔い改めなかった。見よ、わたしは彼女を床に投げ込み、また彼女と姦淫を行う者たちを、その行いを悔い改めないなら、大きな患難の中に投げ込む。黙示録 2:20-22。

イゼベルに対する裁きは、彼女が犬に食べられると成就する。

またイゼベルについても主は言われた、「犬はイズレエルの城壁のそばでイゼベルを食らう。」列王記上 21:23

犬たちは異教ローマ、すなわち竜の勢力である。なぜなら、キリストを十字架につけたのは異教ローマだからだ。

十字架におけるキリストの苦しみにおいて、預言は成就した。磔刑の何世紀も前に、救い主はご自身がどのような扱いを受けるかを前もって告げておられた。彼は言われた、「犬どもがわたしを取り囲み、悪者の会衆がわたしを取り巻いた。彼らはわたしの手と足を刺し貫いた。わたしの骨はことごとく数えることができる。彼らはわたしを眺め、じっと見つめる。彼らはわたしの衣を自分たちの間で分け合い、わたしの着物のためにくじを引く。」詩篇22:16-18。その衣服に関する預言は、十字架につけられた方の友人にも敵にもよる謗りや干渉なしに成就した。彼を十字架につけた兵士たちに、彼の衣服が渡された。彼らが衣服を分け合いながら言い争うのを、キリストは聞いておられた。彼の下着は全体が縫い目のない一続きに織られたものであったので、彼らは、「これを裂かないで、誰のものにするか、くじを引こう」と言った。The Desire of Ages, 746.

犬であり、悪しき者の会衆であり、ギリシャとエジプトである十人の王は、娼婦をも火で焼くだろう。

どの祭司の娘であっても、淫行によって自らを汚すなら、彼女は自分の父を汚す。彼女は火で焼かれなければならない。レビ記21章9節。

十人の王はその娼婦を火で焼く。彼女は自分を女司祭だと自称しているが、実際は娼婦だからだ。

その日、ツロは一人の王の日数にしたがって七十年の間忘れられる。七十年の終わりに、ツロは遊女のように歌う。琴を取り、町を巡れ、忘れられた遊女よ。巧みに奏で、多くの歌を歌え。そうすれば、おまえは思い出される。その七十年の終わりの後、主はツロを顧みられ、彼女は再びその報酬を得ることに向かい、地の面のすべての王国と姦淫を行う。イザヤ 23:15-17。

五節から九節、さらに三十一節から四十節において、竜の権勢の手により教皇制がその終わりに至ることの証言を見いだす。この原理は現在、ウクライナ戦争においても実現しつつある。これら三つの証言は、四十五節において北の王が助ける者もなくその終わりに至るとき、竜が彼女の肉を食い尽くし、火で焼き尽くすであろうことを私たちに告げている。三つの証言にもとづけば、竜の行為の動機には、破られた協定が含まれる。

五節から九節において、第二次シリア戦争は紀元前253年、条約によって終結した。この戦争は紀元前260年に始まり、開戦から七年目に、南の王が自らの娘を北の王に嫁がせ、婚姻同盟によって和平条約が成立した。ところが、その婚姻から七年後の紀元前246年、北の王は南の王から迎えた妃を退け、エジプトの王女と結婚した際に退けていた元の妻を王妃の座に復した。南の王が北方の王国に侵攻し北の王を捕らえるに至った動機は、破られた条約にあった。

その破られた条約は、1797年に破られたトレンティーノ条約を予表しており、それが1798年にナポレオンがローマ教皇を捕囚とする動機を与えた。これは、紀元前246年にプトレマイオスがセレウコスを捕囚としたのと同様である。プトレマイオス3世が、セレウコス2世の治める北方のセレウコス朝に対する勝利からエジプトへ帰還したとき、彼は莫大な財宝をエジプトにもたらしたため、エジプト人は、長年にわたり捕らわれていた彼らの「囚われの神々」を回復したことにより、プトレマイオス3世に「エウエルゲテス」（「恩恵者」を意味する）の称号を与えた。

しかし、彼女の根から出た枝のうちの一人がその地位に立ち、軍勢を率いて来て、北の王の要塞に入り、彼らを攻めて打ち勝つ。さらに彼は、彼らの神々とその君たち、そして銀と金の尊い器を捕らえ物としてエジプトへ持ち去り、彼は北の王よりも長く存続する。ダニエル書 11:7、8

1798年、ナポレオンが教皇を捕縛したとき、彼はバチカンの財宝を略奪してフランスへ持ち帰った。この出来事は、宝物を奪い、さらにセレウコス二世をもエジプトへ連行し、そこでセレウコス二世が落馬して死んだというプトレマイオス三世の事例によって予表されている。これは、1798年にナポレオンが教皇権を獣から引き離したこと、ならびに1799年に教皇が死去したことを予表したものである。『黙示録』第十七章における教皇権は獣にまたがる女であり、セレウコス二世の敗北・捕縛およびその後の落馬死は、（同章で獣として表象される）教皇権の世俗的権威をナポレオンが剥奪したことを予表している。

そこで彼は霊において私を荒野へ連れて行った。すると私は、緋色の獣に乗っている女を見た。その獣は冒涇の名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。...

すると御使いは私に言った、「なぜ驚いたのか. あの女の奥義と、彼女を載せている獣、すなわち七つの頭と十本の角を持っているその獣の奥義をあなたに告げよう。」
... そして、あなたが見た女は大いなる都、すなわち地の王たちを支配している都である。黙示録 17:3、7、18.

第十一章の五節から九節は、北の王と南の王の戦いを導入している。五節は、北の王が絶対的支配に至る前に三つの地理的領域を征服することを明らかにしており、この点が北の王をローマと同定するための根拠となる。これらの節は、北の王が支配するがやがてその終わりに至る時期を示す予言的構造を与えている。これこそが第十一章の根本的な前提であり、約束である。この筋の主題は、教皇権を担う北の王の致命的な傷であり、すなわち四十五節が述べるように「彼は助ける者もなく、その終わりに至る」ということである。この真理は終わりの時代における現在の真理である。

続きは次回の記事でお届けします。